②

①

絵を描くことは生きる力になる

フリードル・ディッカーとテレジンの子どもたち

野村 路子

はじめに、三枚の絵を見ていただきたいと思う。（本・次頁上段①～③）

何の予備知識もなしに、これらの絵を見たら、あなたはどう思うだろうか。普通の子どもの絵、小学校の教室の壁に貼ってあるような絵、特に上手とはいえないけれど、子どもらしい生き生きした絵ではあるかな……という程度で、特別の感想はないのではないだろうか。私自身もそうだった。

プラハの街で、偶然に入った小さな博物館（1989年当時は、今のシナゴーグではなかった）に、説明文もなく並べてあった、たった二十枚足らずの絵。そのまま通り過ぎてしまいそうだったのだが、ある一枚の絵の前に立ったとき、私は、はじめて、今見ている絵が〝普通の〟子どもの絵ではないことに気づいたのだった。

しみだらけの紙の中央に、今、首を吊られようとしている人が描かれていた。その胸に濃く描かれたダビデの星、そして、紙の上のほうに、街灯にもたれて立つ子ども。（写真④）

やっと求めた薄いパンフレットを読んで、私は、それらの絵が、第二次世界大戦の最中、ユダヤ人絶滅作戦というナチス・ドイツの政策の下で作られた収容所の中で描かれたものであることを知った。プラハの北六〇キロほどのところにあったテレジンという収容所の名前もはじめて知るものだったし、そこに、一万五〇〇〇人の子どもたちがいたことも、はじめて知る事実だった。そして、「アウシュヴィッツという地獄への待合室だった」というテレジンで、子どもたちの「絵の教室」が開かれていたということも―。

私は、翌日もう一度、博物館を訪ねた。小さなうす暗い博物館の中で、花と蝶の絵も、林の中でボール遊びをする少女たちの絵も、遊園地のメリーゴーラウンドの絵も、前日とは違って多くのことを語りかけてきた。

パンフレットによれば、絵を教えたのはフリードル・ディッカーというオーストリア生まれの画家で、バウハウスに学び、〝よき時代〟のベルリンやウィーンで、家具やテキスタイル作品を主とするアトリエを開き、舞台衣装のデザインや、幼稚園の設計、そこで使う遊具や玩具のデザインなど、広い分野で活躍していたのだという。

ユダヤ人であるために、活躍の場を追われ、家からも追われ、テレジン収容所に送られたフリードルは、そこで、笑顔も言葉も失っている子どもたちに出会う。親から離され、飢えや寒さに苦しみながら、慣れない労働を強いられている子どもたち。過労や栄養失調で倒れれば、もう労働力として利用価値なしと、貨物列車に詰め込まれて絶滅収容所へ送られる―そんな死と隣り合わせの日々の中で、子どもたちのために命がけで行動しようと考える仲間たちと共に、教室が開かれることになったのだ。

「今日はとてもつらい日だけど、明日はきっといい日になる。希望を捨ててはだめよ」

フリードルは、繰り返し子どもたちにそう語った。「楽しかったことを思い出して絵を描きましょう。大好きだった遊園地、学校…きっと、また行ける日がくるわ」

テレジンに送られる以前から、ユダヤ人の子どもたちは学校へ行くことを禁じられていた。公園へ入ることも、プールに入ることも―。そんな子どもたちが、家から追い出されるとき、大切に持っていた荷物の中には、使いかけのノートやエンピツ、クレヨンなどがあった。そして、フリードルのトランクには、家にあった、ありったけの紙や絵の具やクレヨンが入っていたのだという。きっと役に立つ機会があるはずと考えていたのだ。

それでも、教室がつづくと紙も絵の具もクレヨンも足らなくなった。それを知った大人たちは、ドイツ兵が丸めて捨てた紙を拾い集め、しわを伸ばしてフリードルに手渡した。子どもたちは、小さくなったクレヨンで、封筒の裏や包装紙、ドイツ兵の書類の紙に絵を描いた。楽しかったことを描いていると、本当に明日はいい日になるような気がして、子どもたちは、いつの間にか笑顔で、目を輝かせて話

④

③

し合うようになった…そんな事実を知って見れば、一枚一枚の絵から、子どもたちの「遊園地へ行きたい」「友だちと遊びたい」「花の咲く野原を走り回りたい」と、さまざまな声が聞こえてくるようだった。

そして、収容所の中で、こんな明るい色の、生き生きした絵が描けたことに、私は心揺さぶられた。普通に、家で暮らし、学校へ通う子どもたちと同じような絵が描けたことの素晴らしさ。絵を描いていたとき、きっと子どもたちは幸せな気持ちでいただろう…だが、あの首を吊られる人を描いた子。どんなにフリードルが遊園地の話をしても、この子の記憶に刻まれた悲しい光景は消せなかったのではないか…。

そう考えると、もしフリードルがいなくて、ドイツ兵が気まぐれに紙やクレヨンを渡して絵を描けと言ったら、すべての子が、美しい色を使わず、悲しくつらい絵を描いただろうと思え、一層、明るく生き生きした絵の存在が大きく重いものに思えた。

パンフレットの最後の一行は、子どもたちの運命を知らせていた。「本当に、生きて〝いい明日〟を迎えることができたのは、たった百人だけだった」。この絵は、子どもたちの、この世に生きた唯一の証であったのだ。

それぞれの絵には、小さな名札がついている。フリードルは、絵を描いたら、必ず名前を書くよう教えたという。ドイツ軍は、収容者を人間と認めないと宣言し、その尊厳を奪うために、彼らを番号で呼んだが「違うのよ、あなたたちには名前があるの。一人ひとりに、両親が誕生を祝ってつけてくれた名前があるの」…私は、名前を胸に刻んだ。

どんなひどい境遇の中にあっても、賢く勇気ある大人の力があれば、子どもたちは、目を輝かせて、美しいものを創りだすことができる…こんな生き生きした絵を描くことができる…私は、それを伝えたくて、日本での『テレジン収容所の幼い画家たち展』開催を決意したのだった。

もう十年以上も前のことだが、K市のある小学校の研究授業で、①の絵を生徒に見せたことがある。「あまりうまくない」「花はもっと鮮やかにいっぱい描いたほうがいい」「蝶々が人間みたいな顔でおかしいよ」「もっとたくさんの色を使って、しっかり塗ったほうがいいのに」と、生徒たちの評価は厳しかったが、その後、私が、この絵がどんな状況の中で描かれたものか話したとき、何人かの生徒が、「ごめんなさい」と絵の前で頭を下げた。「絵の具を一人でいっぱい使っちゃいけなかったんだね」「もっと色を使いたくても、なかったなんて気がつかなかったわ」

そして、一人の生徒が泣いた。「君は、蝶々になりたかったんだね、蝶々だったら自由に外へ飛んでいけるものね…この蝶々は君だったんだ」

最初の展覧会からすでに二十年が過ぎた。プラハのユダヤ博物館から譲られた一五〇枚のレプリカの展示である。フレームは歪み、パネルの傷がめだつ。でも、展覧会はつづいている。

フリードルの絵の教室で絵を描いていて、幸いにも生き残った六人の人に会うことができた。みな八十歳を越えているが、当時を語るとき、フリードルを「先生」と呼び、「収容所の中でたった一つ楽しかった思い出」と語るのだ。子どもたちのすべてが絵を描くことが好きだったはずはないのに、疲れて、お腹がすいて、絵を描くよりも寝ていたかったはずなのに、収容所という極限状態の中で、絵を描く時間、美しいものを思い出せる時間が貴重なものだったということなのだろうか。

もう私は、何百回も同じ絵を見ている。それでも、見るたびに心が揺れる。遊園地の絵にも、首吊りの場面の絵にも―。

野村 静子（のむら しずこ）作家
東京生まれ。早稲田大学第一文学部仏文科卒。
1989年、テレジンの子どもたちの絵と出会い、独力でチェコ国立ユダヤ博物館と交渉、91年から『テレジン収容所の幼い画家たち展』を開催。数少ない生存者への取材をかさね、執筆、講演会活動をつづけている。子どもたちの詩も紹介したいと、朗読と歌によるコンサート『テレジン　もう蝶々はいない』を制作。全国各地で上演をつづけ、2001年には、プラハ、テレジンでも上演した。
2011年後期から使用される小学校6年の国語教科書（学校図書KK）に、「フリードルとテレジンの小さな画家たち」が掲載されている。
主な著書
『テレジンの小さな画家たち』（偕成社）『産経児童出版文化賞大賞受賞、「15000人のアンネ・フランク」（径書房）、『子どもたちのアウシュヴィッツ』（第三文明社）、『写真記録　アウシュヴィッツ』（全6巻）（ほるぷ出版）、『テレジン収容所の小さな画家たち　詩人たち』（ルック）、10月出版予定　『明日への教室　フリードル先生とテレジンの子どもたち』（偕成社）
ホームページ
http://www.teresin.jp